

2010 U-15北海道トレセン 中学選抜大会

HFAテクニカルレポート



2010年10月23～25日

【報告者】 國田 英一郎

1. 事業の概要

今年度、U-14 北海道トレセンから U-15 北海道トレセンに変え、地区対抗戦を行うようにしたこの大会は、国体少年 (U-16) へ向けてのステップの一つとして、広く全道のトレセンを活性化し、選手個々の質を向上させることを主な目的として実施することになった。

北海道サッカーの拠点として定着した札幌サッカーアミューズメントパークおよび東雁来公園を会場に、全道各地区トレセンおよびコンサドーレ(札幌・旭川)、札幌中体連を加えた 14 チームが参加した。一部の地区が参加を辞退したが、地区代表が一堂に会して選抜大会を行うのは、中学生年代としては十数年ぶりのことである。

北海道代表はつくらず、2 週間後に北海道選抜による韓国遠征に参加する選手たちも、各地区およびチーム所属のまま参加した。

予選リーグ(1～2 日目)は 8 人制 50 分、順位決定戦(3 日目)は 11 人制 60 分で行った。



2. ペナルティBOX付近の攻略

この年代になると、個の体格差・体力差が小さくなり、体力を駆使した攻撃だけでは、相手を十分に攻略できなくなってくる。上位に進出した地区(チーム)の選手は、有効なポジションをとりながら、タイミングよく空いたスペースを利用して攻撃を展開していた。

しかし、北海道の課題として、依然残されているのがバイタルエリアの攻略、そしてフィニッシュの精度であり、今大会でもそれを実感した。以

下に示す項目は、各地区でさらなる向上を目指して取り組んでほしいと思う。

- ボール保持者は常に選択肢を複数持つ。(仕掛けながらも味方や相手の変化を観る)
- オフの選手はスペースを創る、使う。

味方のアクションがスペースを創る動きとなり、できたスペースを別の味方が利用できるようにパスが回れば、もっと相手を崩しながらゴールへ迫ることができるのではないだろうか。

- スピードに乗ってゴールへ迫りながらもコントロールを乱さない。

スピードに乗るがゆえにボールがコントロール支配下から離れすぎてしまう選手が多かった。スピードも大切だが、相手との駆け引き・ゴール

までの距離や角度を考えたコントロールを駆使して、BOX付近においても、選択肢の多いプレーを心掛けてほしい。



3. 攻撃と守備の一体化

総じて、厚みのある攻撃を展開できているチームは攻守の切り替えも素早く対応できており、厚みのある守備ができていた。このようなサッカーを目指すためにも、北海道としては、以下のことを習慣化させていきたい。

- ボールに近い選手が素早く 1stDF となる。
※むやみにアプローチせずスペースを消す場合にも、そのことを素早く決定する。
- 1stDF 以外のすべての選手が、1stDF の状況に応じてボールを奪うための適切なポジションを取る。※スライド・プレスバック・GK のスウィーパー的役割、etc…。
- 体を張ってゴールを守りボールを奪う。

まだ、待ち構えて相手のミスを待つばかりの守備をする選手は多い。それでは、その瞬間は相手を遅らせることはできても、相手にスペースを与える結果になって、どんどん状況が悪化することも少なくない。いかにして相手のプレーに制限をかけ相手の攻撃のパワーを失わせてボールを奪うか、意図的・積極的な守備を實踐して、攻撃と守備の一体化を図ってほしい。



4. 地区間格差

いかにしてこの年代(受験期)の空白を埋めるかが長年の課題であるが、なかなか解決できない地区は多いようである。現に、明らかにトレーニング不足と思われるパフォーマンスの質の低下および障害の発生が、頻発していた。この大会は今後も継続される予定なので、各地区は取り組みを強化してほしい。

来年度は、北海道およびブロックカブスリーグU-15が通年で行われるので、そこに所属しているチームの選手はチームでの活動の中で強化を図ってほしい。地区カブスもそれに倣って、指導者から中学生に「引退」を突き付けずにプレーの機会を与えてほしい。

トレセン活動としては、ブロックトレセンデー・マッチデーの定期開催を図っていきたい。各地区の切磋琢磨による強化を意図して、北海道全体のレベルアップに対して、各指導者の協力が必要である。

地区によっては、U-15トレセンがプリンスリーグに参加したり、週1回などの定期開催のトレセンを継続したりしている。また、それとは逆に、U-14でトレセンを卒業(?)する選手が多く出てしまう地区もある。北海道としても、選手にとって魅力ある、そして参加するメリットのあるトレセンを目指していきたい。各地区にも工夫改善を願いたい。

5. 今大会の持ち方

今大会の予選1日目は思わぬ大差がついてしまった試合が数試合あった。全道大会における試合としては物足りないと同時に、選手個々の強化にとっては効果の薄いものであったと言わざるを得ない。次年度からは、ブロックトレセンマッチの結果をもとにグループ分けし、拮抗した試合が多くなるようにしたい。

GKからのクリアランスによる再開を採用したが、サッカーのリアリティからすると、検討の余地があると考ええる。全国中体連におけるゴールキックの精度が低いという報告もある。また、8人制で50分を闘える選手の育成を目指していきたいが、現状では体力的に難しかったのではないかという声も聞かれた。現状に合わせるばかりでは向上につながらないかもしれないが、選手の十分なパフォーマンスを引き出すためにも、試合時間を含めたレギュレーションについては考えていきたい。



6. まとめ

次年度の国体には、この年代の選手が出場することになる。また、U-16ナショナルトレセンも開催される予定である。北海道としては、これらを機会として選手の強化を継続し、日本代表や世界で活躍できる選手を輩出していきたい。そのためには、広く北海道全体の強化・レベルアップが欠かせない。各地区・ブロックにおいては、来年1月の交流大会をスモールステップとして、さらなる質の向上を目指してほしい。また、12月の高円宮杯全国大会へ出場する3チームの選手の活躍にも期待したい。

最後に、今大会の運営にご協力いただいたスタッフ・各地区の指導者・関係者の皆様に感謝申し上げます。今後も、ご協力よろしく願います。